

1609～2009 日蘭通商 400 周年記念

2009年、オランダと日本は、両国の通商関係400周年を共同で祝います。この通商関係は、1609年に日本の将軍・徳川家康がオランダ東インド会社に対し、御朱印状という形で常設の商館を設置する許可を与えたことで成立に至りました。この御朱印状は両国の間での初めての公式な合意書となりました。

(「歴史」の欄を御覧下さい。)

さらに、2008年には、正式な外交関係樹立150周年が祝われます。

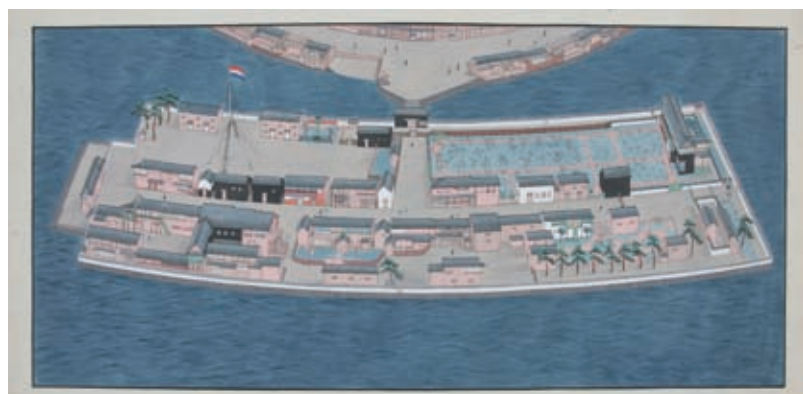
御朱印状が交附されて400年たった今日に至るまで、相互の貿易、投資、技術協力及び文化交流が、オランダと日本の豊かな関係をもたらしてきました。

2009年には、年間を通じて、オランダと日本の多くの団体が通商関係400周年の記念行事を展開する予定となっています。オランダ国内の全ての活動を調整するために、運営委員会が設立されました。運営委員会は、財政手段を持たず、調整の役割のみを果たします。

運営委員会は、在オランダ日本国大使館、日本商工会議所(JCC)、SieboldHuis(シーボルトハウス)、ライデン大学、オランダ経済省及びオランダ外務省の代表から構成されており、委員長には元在アムステルダム名誉総領事のJ.J.N. Rost Onnes氏が就任しています。

運営委員会は行事予定表を作成していきます。通商400周年記念の枠組みで行事を企画することをお考えの方は、経済省のB.C.M. Pulles氏 info@400jaarhandel.nl にご連絡頂けるようお願い致します。

ホームページ www.400jaarhandel.nl では、行事予定表を順次掲載していきます。日本で開催される行事につきましては、在日オランダ大使館のホームページ www.oranda.or.jp を御覧下さい。



長崎・出島オランダ商館の図(ライデン国立民俗学博物館)



「歴史」

1607年、Pieter Willemsz. Verhoeven 提督の指揮の下、13隻からなるオランダ東インド会社の船隊が Texel を出発して東方へ向かった。1609年、このうちの二隻、「矢を持った赤獅子 (de Roode Leeuw met Pijlen) 号」と「グリフィン (Griffioen) 号」が当時の総督マウリッツ王子 (Stadhouder Prins Maurits van Nassau) の書簡を携え、平戸の漁村に到着した。書簡の中で、マウリッツ王子は、将軍徳川家康に対し、日本において常設の商館を設置するための許可を要請した。1600年にデ・リーフデ号で既に日本に到着していたオランダ人 Melchior van Santvoort に伴われ、オランダ東インド会社の特使 Abraham van den Broek と Nicolaes Puyck は、贈呈品とマウリッツ王子の書簡を携え首都であった江戸(現在の東京)に向かった。使節団は歓迎を受け、1609年8月24日、将軍は御朱印状を交附した。一ヶ月後、平戸に常設のオランダ商館が設立され、これが幕開けとなって、以後2世紀以上の間、オランダは西洋諸国の中で唯一鎖国の日本と貿易を許される国となった。19世紀の中頃の日本の開国まで、オランダは日本にとって「西洋に向かって開かれた窓」の役割を果たした。航海術や外科療法などについてのオランダの知識が熱心に研究された。